

自己発見と自主性を高めるボランティア活動（Ⅱ）

— クラブ活動を通して考える —

福 原 信 子

I、ボランティア活動にこだわり続けて

(1) はじめに

この小論は、奈良文化女子短期大学（以下「本学」という）ボランティアクラブ部員がどのような活動をするなかで、部員同士の連帯とともに自己発見と自主性を高めているかについて、その状況をまとめたものである。

(2) 自主活動としてのボランティア活動

現在ボランティア部員は、19名、各学科にまたがり、1回生6名2回生13名である。（平成15年7月現在）。私が顧問として本学ボランティア部の活動に関わったのは、平成11年度以後数年であるが、学生の修学期間が2ヶ年という短いなかで後輩へと引き継がれ今日に至っている。

ボランティア活動は正規のカリキュラムや実習とちがった自主活動である。しかしそれはボランティアという活動を通してこれまでの人生で経験することの少なかった体験により、人として成長、発達を促すのみならずその活動が社会的奉仕に寄与することが特徴である。

(3) 「自己発見と自主性を高めるボランティア活動」（パートⅡ）として

実は、紀要第32号（2001年）に、私は平成11年4月福祉学科新入学の学生55名がその後2年間の学生生活の中で体験したボランティア活動の経緯を「自己発見と自主性を高めるボランティア活動」としてまとめ寄稿した。それはボランティア活動が介護福祉士への自覚をどこまで高められるか、という問題意識の追求でもあった。

今回の報告は、同じボランティア活動であるが対象としてボランティア部員のそれに焦点をあて追求するものである。ボランティア活動により自主性、積極性をどのように身につけさらに自らの人生目標を定めてきたかどうかを検証する意味において、ここでは「自己発見と自主性を高めるボランティア活動」（パートⅡ）とした所以である。

Ⅱ、アンカークラブとの出会い

(1) パイロットクラブとアンカークラブ

- ① 国際民間ボランティア団体としてパイロットクラブ、アンカークラブが活動している。パイロットインターナショナル（パイロットクラブ）は、1921年第1次世界大戦のあと、アメリカジョージア州で働く女性が友情と奉仕によって地域社会に奉仕活動をするクラブとして設立された。「パイ

ロット」とは船の水先案内にちなんだ名称で「よりよい社会づくり、ひいては世界平和の水先案内人になろう」との理念を掲げている。現在世界で6ヶ国約550のクラブ15000人の会員が活動を続けている。日本では1951（昭和26）年、当時オピニオンリーダーとして活躍されていた神近市子さんが共感し東京パイロットクラブを設立され活動が開始された。現在では全国に37クラブの会員が障害をもつ人々がいきいきと暮らせるよう支援するなどを通して社会参加をしている。

- ② アンカークラブは1949年社会奉仕の指導者となるべく青少年を育成することを目的に組織された。「アンカー」とは船の錨のことで「我々はしっかり錨をおろしている」ということから名付けられた。日本では1993（平成5）年、鹿児島女子大学の学生を中心に誕生した。その後アドバイザー及びパイロットクラブの指導のもと地域に密着したプログラムを継続的に実施している。現在国内には8つのアンカークラブあり、パイロットクラブの青少年班の役割をになっている。

奈良アンカークラブは2001（平成13）年12月、奈良大学と本学の48名が日本アンカークラブとして7番目に認証された。

（2）認証式へ向け高まる活動と意識

- ① 2001（平成13）年12月の奈良アンカークラブ認証式へ向け、本学ボランティアクラブはその活動を積みあげてきた。例えば2001年4月から主なものは次のとおりである。

- 5月24日、アンカー説明会（奈良ホテル）
- 6月3日、わたぼうし音楽祭選考会
- 6月10日、チャリティダンスパーティー（たんぼぼの家主催）
- 6月23日、ミニわたぼうし音楽祭（明日香養護学校）
- 7月7日、認証式へ向けての会合
- 8月5日、全国的に知られている、わたぼうし音楽祭
- 10月21日、パイロットクラブウォーク
- 11月10日、バザーのアンカーコーナーの準備
- 12月9日、チャリティーダンスパーティー参加
- 12月10日、認証式リハーサル
- 12月15日、バザー搬入、搬出

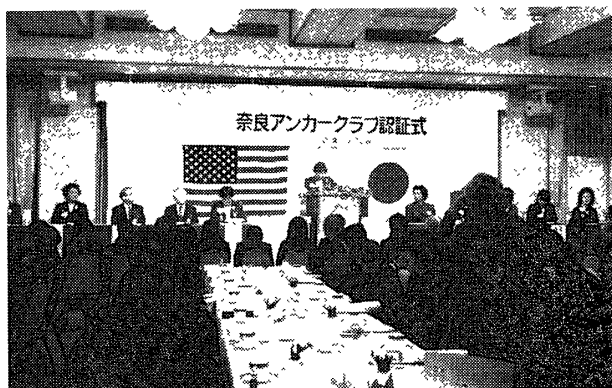
以上のように各月ごとにスケジュールが決められていった。これらの行事は、子ども、障害を持った方へのサポートであり、共演者であり、仲間として参加してきたのである。

- ② 認証式が近づくにつれ、ボランティア部の学生の意識は徐々に高まっていった。自分たちの活動が他の方から認められるという意識である。「認証式には大勢の方が来られる」「これまでの活動が認められた」「各界の知名な方も来られる」「練習もきっちりしておきたい」などなど。

（3）決意新たな奈良アンカークラブ認証式

- ① 2001（平成13）年12月22日、奈良大学と本学の学生ボランティア部が一つの団体としての奈良アンカークラブが認証され発足した。奈良ホテルで開かれた認証式には県内の有識者も含め190名が出席しその門出を祝い期待の言葉が述べられた。
- ② 二つの大学のボランティア団体は、もともと障害児・者への援助や文化活動をサポートしてきて

経過があり、ここに二つの大学の学生同士が交流・連携できる貴重な機会であると設立にふみきったものである。今後は「奈良パイロットクラブ」と協力しながら脳関連の障害を持つ人々への支援活動を展開することになった。翌日の奈良新聞に大きく報じられた。



わくわく、ドキドキ、奈良アンカークラブ認証式

Ⅲ、広がる輪の中で

(1) 各月びっしりのスケジュール

- ① 認証式を終えた奈良アンカークラブの一員となったボランティア部は、2002（平成14）年明けから活動の輪がいつそう広がった。
 - 1月の奈良アンカークラブの役員会で活動の方向を決める。
 - 3月31日奈良パイロットクラブ主催のチャリティーコンサートへ障害を持つ子どもとともに参加。
 - 4月には、8月に開かれる「わたぼうし音楽祭」（たんぼぼの家）で歌われる音楽祭詩の選考、奈良パイロットクラブ例会出席、アンカークラブ全国大会（秋田県）参加など、新学期の土、日曜日をフル活用した。
 - 5月には、さざんかホールでの車椅子ダンス・歌体操・チャリティダンスパーティーの準備と参加、新人歓迎会をかねた奈良アンカークラブの交流大集会（この項はⅢ(2)に別記）と目まぐるしく動いた。
 - 6月は、わたぼうし音楽祭の作詞、作曲の部の選考に参加。
 - 7月には、ブレンマイナーズ（脳障害をおこさない）運動で幼稚園へ（この項はⅢ(3)に詳細）。
 - 8月4日わたぼうし音楽祭本番では、これまでのとりくみの成果発揮とばかりミニバザー、音楽祭パイロット賞贈呈をはじめ成功のために全力を注いだ。実況は24時間テレビチャリティーとして放映された。
 - 9月には、新入会員との懇談会。
 - 10月に入ると、1日の赤い羽根共同募金、大和高田市のおかげ祭り、脳障害者や高齢者の社会参画を旨とするパイロットウォークなど楽しさと若さアピールにも意欲を示した。
 - 11月は、養護学校での車椅子ダンス・手話の発表、奈良教育大学での子どもフェスティバル、さらに奈良パイロットクラブの交流会参加、と間断なくつづいた。
 - 12月には、恒例のチャリティバザー、奈良大学との交流を兼ねたクリスマス会がある。
 - 2003年1月には、奈良市内の福祉作業所の餅つき大会にはじまる。



やったー！ 入賞でV、高田おかげまつり

○以後各月のアンカークラブ例会出席をはじめ、4月には広島市でのコンペションなどと続くスケジュールである。

- ② 養護学校からの反応もボランティア部員を感動させるものである。

「こないだはありがとう くるまいすだんすはじめてしたけどたのしかったです」「たのしかったのでお姉さんたちに お手がみを書くといったので1人では字を書けないので私といっしょにえんぴつをもって書きました」「がっこうにもじかんがあれば きてくださいおねがいします」(以上原文のまま)

- ③ 『ボランティアを通して楽しい学園生活』と題して福祉学科2回生のMさんは手記をしている。

「……一生懸命練習した車椅子ダンスは、本校のオープンキャンパスや車椅子ダンスパーティーや、ステップこもれびコンサートなどで発表しました。初めての発表の時、皆さんが私たちのダンスを見て一緒に楽しんでもらえるのか、とても不安でしたが、皆さんも真剣に見てくださり、歓声と拍手をいただいた時はとても嬉しい思いが込み上げてきました。……ボランティア部に入部し、沢山の方々と活動を共にし、いろんな所にも行かせて

いただきました学校では学べないことを学ばせていただいた事をこころから感謝しています。私たちは、もうじき卒業しますが、1年生の皆さんもボランティアを通していろんな事を学んで欲しいと思います。又、私たちが卒業後いろんな場でボランティア活動を続けて行きたいと思います。」

(2) 若者のはじける第1回合同研修交流会開く

- ① 2002(平成14)年5月18日、奈良アンカークラブは、パイロットクラブ会員を含め第1回研修交流会を開いた。

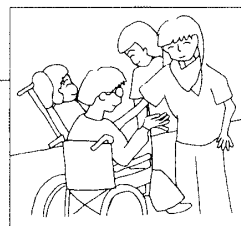
交流会は、出席者の確認、お客様の紹介、会長挨拶、アドバイザーからクラブ紹介があり、引き続いて各テーブルからワークショップを兼ねた交流が行われた。それは若者のはじけるようなつどいとなった。楽しいことを通じて連帯感がみなぎった。本学がブレインマインダーズ(脳障害を予防するために作られた子ども向けの紙芝居)発表を行い、奈良大学の方やお客様も喜ばれた。二校が4グループに分かれ、それぞれのグループでブレインマインダーズ作りを行った。グループ内で



こないだはありがとう
くるまいすだんす
はじめてしたけど
たのしかったです
がっこうのおとも
だちにもお世話や
りたいので



おねえさんたちと
あくしゅ たのしい
くるまいすダンス



第13回 チャリティーダンスパーティー
主催 たんぼぼ子供の家



楽しく創作車椅子ダンス

会話も弾み協力して行うことができた。先日行われた全国のアンカークラブ交流会で行ったゲームをし交流は深まった。

- ② この交流研修会に参加した衛生看護学科のKさん、Yさんの2人は、次のような感想を寄せている。

「……私たち奈良文化女子短期大学生が障害ある幼児から低学年向けの紙芝居を発表し、両校で協力して紙芝居を作成しました。また、二人組になって肩を組み空いているお互いの片手で紐を結ぶ簡単なゲームなどを行いました。このゲームは障害者の方や子どもたちが指先の運動をすることにより、脳の活性化を促すことを目的とするものです。……今回の交流会で、お互い親睦を深めることが出来たと共に意味のある会になったと思います。これからも地域の人々の役に立てる様に、又将来看護師を目指す者として自分自身の為に両校共協力し合ってボランティア活動をしていきたいと思います。」

(3) 不慮の事故などによる脳障害を起こさないように

- ① 幼児期の死亡の原因の第1は、不慮の事故によるものである。ボランティア部は2002年7月、本学の附属幼稚園児との交流を行った。紙芝居（プレンマイダース）や体操を通じ脳障害を起こさないよう、又脳の大切さを知ってもらう活動である。



本学附属幼稚園児と紙芝居で楽しく交流

- ② この日の幼稚園児との交流について、衛生看護学科1回生のWさん、Kさん、Jさんの3人は次のような感想を述べている。

「……脳関連障害者支援をしており、外傷性脳疾患という交通事故や不慮の事故によっておこる脳の障害を予防するために、プレンマイダースという子ども向けの紙芝居をしています。プレンマイダースは米国でつくられたものだったので私たちはもっと子どもたちに親しめるように分かりやすく日本語に直



アイン体操でアイン！アイン！

し、7月末にそれを本学附属幼稚園で交流を深める意味を込めて行いました。……幼児期の死亡の原因の第1位は、不慮の事故です。このようなちょっとした不注意で幼い子どもの命がなくなったり、障害を負ってしまうことはとても悲しいものなので、少しでもこの数が減るように紙芝居を続けたいです。今回の交流を通し、子どもたちが少しでも脳の大切さを知り、これから先安全に注意して楽しく遊んでくれたらうれしいです。」(2002年11月25日「奈良新聞」より)

Ⅳ、ボランティア部員へのアンケートにみる心の窓

(1) よかった点、今後の活動など具体的に

① 2003(平成15)年1月、ボランティア部員全員を対象にボランティア活動について簡単なアンケートを実施した。そのねらいは、これまでみてきたようにボランティア部として学外、地域への活動の輪がひろがるとともに、部員のこころのなかでどのようにとらえられているかを観察することであった。

部員は1回生13名(提出13名)、2回生11名(同10名)の24名(同23名)が対象である。設問は4項目である。1、アンカークラブに参加して(①よかった、②よくなかった)。2、「よかった」に○をした方に、どんな点がよかったか。3、「よくなかった」に○をした方に、どんな点がよくなかったか。4、今後どんな活動をすればよいか。

② その集計は以下のとおりである。

設問1、○よかった、13(1回生) + 9(2回生) = 22(計)。

○よくなかった、1(2回生) = 1(計)(ただしこの回答もその内容はもっと活動したいという要望である)。

設問2、どんな点がよかったかの具体的記述は多様である。特徴的な例を列記すれば次のとおりである。

○アンカークラブの歌、アイン体操、歌合わせ、手話、頭を働かせる紙芝居、動物のキャラクターが出てくるのがよい。ダンスも楽しい。

○これからもボランティア活動に頑張ろうと思った。皆んなで力を合わせて踊ったこと。

○他校の人などたくさんの方と交流ができた。手話も覚え人との出会いや経験ができたこと。

○プレゼント交換がおもしろい。

○音楽を聞き自分で創造して作った車椅子ダンス。

○いろんな所へ行けたし、おいしいものも食べた。

○紙芝居など喜んでもらえたこと。などである。

設問3、どんな点がよくなかったか、については

○もっと活動したいという不満。また設問2で、よかったという中にも部員が遠いところはイヤなどグチを言うのはよくない、という意見もみられた。

設問4、今後どんな活動をすればよいか、についても多く述べられている。

○今後も歌体操、車椅子ダンス、手話、紙芝居などを楽器なども交えもっと工夫して楽しめるように。

○いろいろな施設やその利用者とのふれあい機会をつくれれば。

○吉野地方で活動したい。

○施設へのボランティアを。バザーも増やして。

○身近なところで活動したい。

○自分らで作った車椅子ダンスを生かしたい。

- 遠いところが多いのは考えなおして。養護学校へも行くといい。
- 助け合い、アイデアを出し合っていくこと。
- 障害のある方との運動会など交流を。幼稚園や老人ホーム訪問を。
- 紙芝居から人形をつかうなど工夫し、幼児の興味あるものに。
- 植物を栽培してプレゼントを。
- 脳の紙芝居つづけてほしい。

(2) 乙女ごろの夢をつづけさせてあげたい

- ① 設問1、で問う「アンカークラブに参加してよかったかどうか」は、事実上全員「よかった」と感じていることである。ボランティア部員だから当然と言えばそれまでであるが、年度途中とか年度変わりの時、卒業や新入生を除き部員の入れ替わりが少なく概ね卒業まで続けている状況からみれば、やはり本当によかったと言えるだろう。
- ② 設問2、で「よかった」内容は、歌体操であれ紙芝居であれそこに他校の学生、施設の利用者、幼稚園児、アドバイザーなど人との出会いや交流があることへの共感である。そして部員同士の連帯でもある。学生という若い年齢であればこそ発揮できる特権でもある。もちろんボランティア活動だからという訳ではないがそこに奉仕する考えがあるのが特徴となる。こうした意識のうえにたって、歌体操も紙芝居も楽しくやれるだろう。特に自ら作った車椅子ダンスやわたぼうし音楽祭での作詞、作曲にかかわった楽しい経験は自らにとっては貴重となるにちがいない。若者にとって楽しさは欠かせない。
- ③ 設問4、で「今後の活動」については、以上の「よかった点」の延長線上の意識があるとともに、「人形を使う」というようにそれをのり越えて工夫していく積極性もあることに注目したい。人は進化するものであるが、乙女ごろの夢をつづけさせていくのは我々大人あるいは行政や学校など社会の役割かもしれない。「植物のプレゼントを」の心根を理解してあげたい。

V、このような自分になりたいという意識が

(1) 継続した積み重ねの中で

- ① 数年前、私は福祉学科の学生を相手に、ボランティア活動への期待としてつぎのように提起したことがある。
 - 介護福祉士をめざす貴女がひとり一人が人間として自主性、主体性をもって生き生きと成長、発達してゆくためには、高齢者やさまざまなハンディキャップをもって生きる人たちともお互いの立場をよく知り、学び、思い合う心情を育て、相互に援助、協力しあって生きていく態度、精神を養っていくことが大切であること。
 - 変化する社会のなかで「私」という存在を明確にしながら、いま出来ることは何かと自分の目で確かめ、頭で考えること。
 - ボランティア活動は「自分に何が出来るか」「どういうボランティアをしたいのか」をじっくり考え、出来ること、したいことを発揮する場を自ら選んで求めていくことに意味があること。
 - 就職をも視野に活動を考えよう。

いま考えると未成熟な面もあるが、当時としては部員が継続してやってほしいという考えで必死であった。

- ② 今年2003（平成15）年4月、パイロットクラブの第13回日本ディストリクトコンベンション（大会）が広島市で開かれ、そのなかでのアンカークラブのプログラムも用意され奈良アンカークラブとしてわがボランティア部からも参加した。行事は記念講演、特養など施設訪問、交流会、ミーティングなど3日間にわたった。「子どもの事故は予防できる」という記念講演が注目された。日本では乳幼児の事故による死亡率は先進国では1位であり、また1～19歳の不慮の事故死では交通事故、溺死、窒息などであるという。

これに参加した衛生看護学科Wさんはつぎのような手記を寄せている。

「……子どもも大人も安心して生活していける環境作りをして行く必要があります。未然に防ぐための具体的な対策が重要で、安全教育がその中の一つです。私は看護を勉強しています。不慮の事故で傷つく子どもと悲しむ家族が減るようにしていきたいと考えています。今回の講演を聞きこれからのボランティア部の活動を見直し、ブレインマインダーズを通してもっと多くの子ども達や周りの人達に安全に注意してもらいたいです。」

- ③ 私（福原）がボランティア活動をともにするなかで感ずることがある。それは共に生きる一員として子ども、お年寄り、障害をもった方やその保護者、あるいはアドバイザーなど多くの方々と出会い、交流し、感動を共にするなかで彼女たちが自らの生きる方向を見つけだしているということである。

例えば、「介護福祉士になりたい」「看護師になりたい」と入学してきたが、ボランティア活動で多くの人と接したり地域社会で活動するもとの、「私は介護福祉士として音楽療法もとりいれていきたい」「私は障害児専門のナースになりたい」「わたしは保健婦資格をとり地域に貢献したい」と抱負を語っていること、そしてそのための勉学にも精を出していることである。

こうした積極性は、学校のオープンキャンパスや課題学習などの場ではリーダーとして活躍していることにも見られることである。このことは、目的をもって人生を切り開く自己発見と自己啓発につながるものである。

(2) “ボランティア活動してよかった” — 終わりに代えて —

- ① 2年間の修業年数を終えれば学生たちは卒業である。ボランティア部員たちはどのような感慨をもって巣立っていったのだろうか。この小論の最後に彼女たちから出してもらった次のような感想を記しておきたい。

「ボランティア活動で得たもの、教わったものが数多くあります。これからは福祉の職場で働く中で常に相手の気持ちを尊重し、思いやりの気持ちをいつまでも忘れず頑張っていきたい。」（福祉学科Kさん）

「沢山のひとと出会い、有意義な活動が出来たと思います。福祉施設で車椅子ダンス、手話コーラス、歌体操を披露したときの利用者の方々の感激と拍手はとても嬉しいものでした。……皆と協力し一つの事をやり遂げた達成感は素晴らしいものでした。……学生生活をより充実したものに出来たと思います。」（福祉学科Aさん）

「学校卒業後は介護福祉士として福祉施設で働きます。もし今後、行きずまってしまったら、アンカークラブで学んだことを思いだして解決につながる糸口にしたいです。」(福祉学科Mさん)

「職場でも楽しくアンカークラブで習ったことを生かしていきます。」(福祉学科Hさん)

「始めはものすごく人見知りがあってなかなか子どもとも喋れなかったり、ダンスは嫌だなあと思いましたが本番踊ると楽しくなるし、ちょっとのきっかけで子どもと仲良くなるのでいいなあと思います。」(福祉学科Sさん)

「私はこの春から高校からの夢である介護福祉士になります。……私は小さいころからお年寄りの方とお話しするのが好きなのでこれからはもっといろんな事にも挑戦していきたいと考えます。2年間のアンカークラブとして活動できて良かったです。」(福祉学科Oさん)

「学校での勉強や看護師になるための実習など忙しい日々でしたので参加できない行事もありましたが、アンカークラブのメンバーとなって、人と人が支え合うというのがどんなに大切なことが再確認できたと思います。」(看護学科Yさん)

- ② 以上のように2年間という短い期間に、しかし学生たちにとっては大切な青春時代におけるボランティア活動が、対人関係、問題解決能力、生活技術能力など人としての成長、発達をうながす出会いの場となったことを、私は確信するものである。

参考文献

- 木谷宣弘 他 「ボランティア論」 日本放送協会学園 2000年4月
- 介護福祉研究会 「介護福祉学」 中央法規 2002年2月
- 日本介護福祉教育学会 「介護福祉教育NO 15」 中央法規 2003年3月
- 日本介護福祉教育学会 「介護福祉教育NO 16」 中央法規 2003年7月
- 福原信子 「自己発見と自主性を高めるボランティア活動」 本学紀要第32号 2001年11月